

改訂の序

超高齢化とともに、術後の生活機能や生活の質の維持はきわめて重要なゴールである。術後の神経機能障害の発生により、離床の遅れ、入院期間の延長、要介護の増加などが発生し、医療経済的にも、支援する家族の負担も、著しく増加する。一方神経機能障害として、運動、感覚、視覚、聴覚、味覚、嚥下に加え、さまざまな神経機能が関与するため、その評価は複雑である。近年、術中に各種神経機能をモニタリングできるようになり、術中から早期に異常を発見することで、これらの機能を温存する方策が検討されている。しかし、術式が脳外科手術、整形外科手術、大血管手術、耳鼻咽喉科手術など多岐にわたるとともに、各手術により守るべき神経機能も異なるため、各手術における神経モニタリングの実施は容易ではない。また、外科医だけでなく、麻酔科医、臨床検査技師、臨床工学技士などさまざまな職種が関与するため、安全で質の高い神経モニタリングの提供には、良好なチーム医療体制の構築が必須である。以上のような現状において、本書「術中神経モニタリングバイブル」は、術中に神経モニタリングを実施する際に、良好な神経モニタリングの実施の助けになればと考える。

2014年に初版を発刊したが、術中神経モニタリングに関し、新たな知見も増えてきたため、今回の第2版の発刊に至った。神経機能として膀胱直腸障害、咽頭・喉頭の解剖やそのモニタリング、振幅増幅のための工夫、アラームポイント、有害事象、フリーランEMG、術中脳波モニタリングなどの項目を追加した。また、日本麻酔科学会から運動誘発電位モニタリング時の麻酔管理のプラクティカルガイドが発刊されたため、その内容に準じる形とした。現在、日本臨床神経生理学会でも術中神経モニタリングに関するガイドラインを作成中であるが、用語の統一に関する最終見解が得られていないため、暫定的な用語記載とした。術中神経モニタリングについてはい

まだ不明な点も多く，現時点で使用されている情報として理解いただきたい。内容については今後，さらにアップデートされることが予想される。本書が多職種チームで携帯できる，明日からの術中神経モニタリングの助けとして，患者の機能的予後の改善に資することを期待する。

2020年9月

奈良県立医科大学麻酔科学教室
川口昌彦